

頭葉では平均2.1剤と、難治の傾向のある側頭葉てんかんで多剤投与がされている。

てんかんセンター開設以来5年間に1526名が受診しそのうち県内が1366名である。これは新潟県内推定てんかん患者数の1/10に相当する。これら患者について若干の分析を試みたが、てんかんセンターであるため難治が多い片寄った結果である可能性は高いものと思われる。

2) 当院における定型欠神発作の脳波学的・臨床的検討

渡辺 徹・石塚 利江 (新潟市民病院)
佐藤 雅久・阿部 時也 (小児科)
小田 良彦

定型欠神発作は、突然の意識消失および回復、脳波上、左右対称性の3c/s spike and wave complexを特徴とする発作群である。従来予後良好の疾患と考えられてきたが、最近、かならずしも予後良好ではないといわれている。今回我々は、定型欠神発作の予後を検討するために、当科通院中の本症25例について初発年令発作型、熱性けいれんの既往、治療に対する反応、脳波改善までの期間等につき検討した。

- 1) 初発年令は2才6ヶ月から11才まで、平均7才8ヶ月であったうち4才から9才までが22例と、88%をしめた。男女比は1:4で女兒に多かった。経過観察年数は、1年4ヶ月から10年3ヶ月まで、平均4年5ヶ月であった。
- 2) 発作型は、23例が単純型で、間代欠神、自動症欠神が各1例であった。一般には複雑欠神が圧倒的に多いといわれており、軽微な随伴症状を見逃していた可能性がある。大発作の合併は1例のみであった。
- 3) 熱性けいれんの既往は13例中5例にみとめ、一般集団に比し、高い率を示していた。予後との関係は明らかでなかった。
- 4) 知能障害、けいれん性疾患の家族歴を認めた例はなかった。
- 5) 全例で発作の消失を見た。うち22例が1年以内と、比較的早期に消失していた。
- 6) 3c/s spike and wave complexは全例で消失した。うち1年以内に消失したものは、14例のみで、発作消失期間に比し、やや遅れていた。

3) 前頭部にてんかん波を有するけいれん児の検討

佐藤 雅久・石塚 利江 (新潟市民病院)
渡辺 徹・阿部 時也 (小児科)
小田 良彦

日常臨床に於いて、前頭部にてんかん波を有する例は比較的稀である。そして、その発作症状も発熱時の痙攣のみの例から、小児期の良性部分てんかに類似した経過をとるもの、激しい運動性の自動症を伴い前頭葉てんかに分類されるものなど、種々の病態を含んでいる。今回我々は昭和49年6月より60年7月までの11年1ヶ月間に当科を受診し、発作間歇期脳波記録で前頭部に狭義のてんかん波を認めた例を、臨床的、脳波的に検討し報告した。

- ① 対象は17例で、男11例、女6例であった。
- ② 最終観察時年令は、4才7ヶ月より20才1ヶ月で平均11才6ヶ月であった。
- ③ 経過観察年数は、1年10ヶ月より14年2ヶ月で平均6年2ヶ月であった。
- ④ 痙攣発作の初発年令は、5ヶ月より14才1ヶ月まで幅広く分布し、平均4才1ヶ月であった。しかし、6才以下の発症が17例中14例と多く認められた。
- ⑤ 熱性痙攣の既往歴を、確認し得た15例中10例と高率に認めた。
- ⑥ 発作分類では、
 - 1) てんかん疑い(発熱時痙攣のみ) : 4例
 - 2) 複雑部分発作(以下CPS) : 9例
(全身痙攣(以下GS)合併例 : 4例)
 - 3) 全身痙攣のみ : 4例
 であった。
- ⑦ 各発作型の予後を、発作消失までの期間で比較すると、てんかんの疑いの4例は、全例抗痙攣剤服薬後発作が消失した。しかし、CPSの9例では、GSを合併しなかった5例は容易に抑制されたが、GSを合併した4例は抑制までに1年から13年1ヶ月を要した。GSのみの例も容易に抑制された。自動症の有無にかかわらず、GS合併例は比較的治療抵抗性であった。
- ⑧ てんかん波の焦点部位は、
 - 1) 他部位より前頭部へ移行した例 : 8例
 - 2) 前頭部だけの例 : 5例
 - 3) 前頭部と後頭部に同時に認められる例 : 4例
 であった。

特別講演

てんかんの予後と治療をめぐって

弘前大学医学部 神経精神科

福島 裕 先生